民主香川

定価　月 100円
発行所
民主香川社
高松市藤塚町
３丁目13－14
☎(087)834-7311

「命の声」届け政治変える　新参院議員　白川容子さん

国民の願い抱えて国会へ

候補者活動の場を衆院四国ブロック４県から西日本17県に広げて８カ月。人口規模も要求運動、政治課題もさまざまな西日本。体力的にも「私に務まるのか」と不安からのスタートでした。命を粗末にする政治の転換を願う声に背中を押され、国会へ駆け上がった新参院議員の白川容子さん。選挙を振り返っての思いや抱負を聞きました。（しんぶん赤旗日刊紙７・26／古荘智子）

厳しい猛暑に負けず地道に宣伝や支持拡大に取り組んだ党員、後援会員、ＳＮＳを担ったサポーターなど一人ひとりの奮闘で獲得した議席だと痛感しています。選挙の報告で訪問すると、歓迎と同時に、国会で取り組んでほしい要請も受けました。比例５人全員国会へ、選挙区でもさらなる前進をと訴えてきましたが、３議席にとどまったのは大変残念で複雑な思いです。

衆院に続き自公与党を少数に追い込みましたが、自民党の補完勢力や排外主義を唱える政党が伸びました。かつてない激動の情勢です。国会と草の根の運動を結んでの勝負となります。これまで以上の支えが必要です。ともに闘ってほしい。心からお願いします。

西日本で進む基地強化や暮らしの現場に足を運んできました。「負けるのは諦めた時」と不屈に闘う沖縄のみなさん。人手不足や経営難で「このままでは廃業する」と悲鳴をあげる病院や介護事業所。「お米の値段が上がっておかわり禁止に」と要求アンケートに答えた広島の小学生の話が胸に刺さって離れません。これらの「命の声」を国会に届けるのが私の仕事です。

私は政見放送で「女性の声が政治に反映されない社会のままでいいのか」と、少子化対策として出産を前提とした婚活などに疑問を呈しました。「若い女性は大学に行かず子どもを産め」などと女性を侮蔑する主張にも演説で批判してきました。各地で「今度こそ当選を」と熱い期待を感じました。やはり日本共産党の女性議員が必要だと私を押し上げていただいた結果でもあると思います。その声を受け止めて頑張ります。

自公維新の医療費４兆円削減を食い止め、社会保障充実へかじを切る時です。医療現場出身者としてまずケア労働者の待遇を改善したい。病床つぶしやＯＴＣ類似薬の保険外し、終末期医療自己負担化に徹底して反対します。選択的夫婦別姓、同性婚など押し込められてきた女性やマイノリティーの願いを実現します。

西日本の願いの声をすべて抱えて国会へ―今度はその声を、政治を変える力としたい。全力でみなさんとのお約束を果たす決意です。

《略歴》

1966年徳島県生まれ。日本福祉大学第２部卒業。98年参院選候補から、これまで衆参で７回国政に挑戦。香川県議４期（2003～17年）。党中央委員。

太鼓台

フランス在住の中島さおりさんの「哲学する子どもたち」という本を5年ほど前に読み、日本とフランスでは教育事情が大きく異なると驚きました。

フランスでは、親が働くのが当たり前で、3歳で保育学校（日本の幼稚園や保育所）に全入。学校の時間が終わった後も、親が迎えに来るまで学校の敷地内に残って、宿題をやったり遊んだりしていられる「延長保育」や「学童保育」のようなシステムも完備しているようです。保育所には入るためには親ばかりか同居の祖父母まで就労証明が必要な日本とは大違いです。

保育学校入学から高校まで、公立校に通えば授業料の負担は一斉なく、国立の大学も学費の負担は年に数万円の登録料だけですむそうです。

この本は教育内容について書かれた本ですが、筆者がはじめに述べているのは「フランスの教育から日本が学ぶことといったら何よりもまず、『教育の無償化・平等化』だ、とあり、その通りとうなづきました。（こ）

☆日刊紙　３４９７円／月
☆日曜版　９９０円／月

「しんぶん赤旗」はこの間、「桜を見る会」「日本学術会議の任命拒否」「自民派閥パーティーの裏金事件」「裏金非公認候補への２００万円」のスクープを出してきました。これらのスクープは、安倍晋三首相、菅義偉首相、岸田文雄首相、石破茂首相の四代首相を追い詰めてきました。差別主義・排外主義を許さない、真実を追究するしんぶん赤旗のご購読、ご愛顧をぜひよろしくお願いします。10月からは日曜版の電子版も発行予定です。

https://youtu.be/7iM79M2NH4O?si=NrKktg5CEA99nPZb

第44回８・15戦争体験を語り継ぐ集い

「戦争体験を伝えることの意味」をともに語ろう

☆日時：8月15日（金）13：00～15：30
☆場所：瓦町ＦＬＡＧ ８階 アートステーション多目的スタジオ
☆参加費：無料

主催／８・15戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会
（ＴＥＬ：090－8280－6387）
共催／高松市平和を願う市民団体協議会
後援／高松市

◎今月の花

ルリマツリと木イチゴ

これからの社会保障を考える

高齢化、人口減少そして「大軍拡」の流れの中で　25

社会保障のあり方について考える会　準備会　藤井　明

「支配」（譲歩と懐柔による「支配」）から「政策」へ、そして更に「権利」としての「社会保障」へ

前回までで、資本の本源的蓄積の時代から、産業資本主義、独占資本主義、国家独占資本主義へと経済システムが変化するに連れて、社会保障がどのように形成され発展して来たか、その跡をたどって来たわけですが、前立正大学教授の芝田英昭先生は、それらを、「支配としての社会保障」、「政策としての社会保障」、そして「権利としての社会保障」のダイナミクス（動力学）だと表現しておられます。

前回触れたように、社会保障が現在の様に「政策」として確立したのは１９２９年の世界大恐慌がきっかけでした。経済的な危機と社会不安、そして制度としての社会主義の（一面での）優位性を目の当たりにして、資本主義の順当な発展のためには社会主義国家にも劣らないような生活保障制度の確立が急がれたわけですが、その意味でこれは、資本主義体制維持のための社会保障、即ち「支配のための社会保障」と言う原初的な形態を宿していたと言うことです。

しかし、具体的な制度でもある「政策としての社会保障」は、支配層が譲歩と懐柔による体制の維持を目指していたとしても、「国家」と「国民」との力関係によって揺れ動き、運動が高まれば「権利としての社会保障」に近づくと言う側面をも併せ持っています。

自治体研究社の「基礎から学ぶ社会保障」（２０１６年３月15日）の中で先生は、「国家の力が国民に対して比較的大きければ、『政策としての社会保障』は『支配としての社会保障』により近づき、社会保障制度は、基本的・基礎的部分のみをカバーし、それを超える部分については利潤の対象へとシフトされるであろう」と書いておられますが、先般の高額療養費自己負担限度額引き上げの問題の際も、民間保険へのシフトが視野に入っていたことは間違いないでしょう。

２０２５年度の「経済財政運営と改革の基本方針」（骨太の方針）でも、医療や介護についてはその「適正化」が課題とされています。サブタイトルは、“「今日より明日はよくなる」と実感できる社会へ”、だそうですが、国民の側が心して運動を強めなければ、「今日より明日が悪くなる」ことは明らかです。